

# みじめおばさん

昔むかし、あるところに、まことに、おばあさんがいました。おばあさんは、みじめおばあさんとよばれていて、年とつた犬といつしょに暮らしていました。

おばあさんの財産といえば、庭にはえている一本のナシの木だけでした。ところが、秋になつてナシが実つてくると、毎日、村のいたずらっ子たちがやつてきて、おいしそうにじゅくした実をみんなとつていつてしましました。そんなことが毎年つづきました。  
おばあさん

「わたしははらがへつて死にそうだ。どうか、食べ物をめぐんでおくれ」

「まあ、それはお気のどくに。でも、どうしましよう。うちには、黒パンが半分しかないんですよ。でも、これでいいんなら、おあがりなさい」といいました。おじいさんは、パンを受けとつて、

「あなたは、ほんとうにやさしい心の持ち主だね。おれいに、願い<sup>おが</sup>ご」とをひとつかなえてあげよう」といました。みじめおばさんは、考えてからいいました。

「そうね。私の願い」とはただひとつ。私のナシの木にさわったものは、みんなぴったり木にくつついで、私がはなしてやるまで、にげられないようにしてほしいんだよ。みんなでナシの実をぬすんでしまって、それはひどいんですよ」

「では、望みどおりにしてあげよう」といつて、どこかへ行つてしましました。  
のぞ

つぎの日、みじめおばさんはナシの木を見にいきました。すると、木には、男の子や女の子がたくさんくつついてぶら下がっていました。子どもたちをひきはなそうとしたおかあさんたちまでぶら下がっていました。お母さんたちをたすけようとしたお父さんたちまでぶら下がっていました。鳥や犬もぶら下がっています。ナシどころをつかまえに来たおまわりさんまでぶら下がっているではありませんか。

みじめおばさんは、おなかをかかえて大笑いました。

それから一年のあいだ子どもや姫たちはナシの木にぶら下がったままでした。みんなもう、ナシの実をぬすむなんて、まっぴらだと思いました。一年たつと、みじめおばさん

はみんなを木からはなしてやりました。

長い長い年月がたつたある日のこと、みじめおばさんの家の戸をたたくものがありました。

「おはいり」と、みじめおばさんは返事をしました。入ってきたのは、死神でした。死神はいました。

「これこれおばあさん。おまえとおまえの犬はもうたつぱり生きただろう。わたしはおまえたちをむかえにきたんだよ」

みじめおばさんは答えました。

「あんたにつれていかれるのもしかたがないだらうね。わたしももう歳だからね。でも、うちの中をかたづけていく前に、ちょっと手伝つてほしいことがあるんだよ。あそこのナシの木に実がたくさんなつてるだろう。あの実をとつてくれないかい。あれは世界じゅうのどこのナシの実よりおいしいんだよ。あんなおいしいナシの実をほうつていくのは、もつたいないと思わないかい」

そういうわれると、死神はナシの実を食べてみたくなりました。そこで、「そもそもそうだなあ」といつて、木に近寄ると、実をひとつとろうとしました。そのとたん、死神の「一つ二つした骨のよう<sup>ほね</sup>な手が、木にぴたりくつついてとれなくなつてしましました。死神は、ナシの木にぶら下がつてしましました。

「そちらごらん、あんたはその木にぶら下がつたまま、ひからびるがいいよ」と、みじめおばさんはいました。

さて、それから世の中はどうなつたと思しますか。

もうだれも死なくなつたのです。水の中に落ちても、おぼれて死ぬことはありません。ビールをいっぱい積んだ馬車にひかれても、ぜんぜん痛くもありません。首を切つても、生きています。

死神はそうしてまるまる十年間、夏も冬も、風のふく日もあらしの日も、木にぶら下がつっていました。けれどもそのうち、みじめおばさんは、死神が気のどくなつて、「もしかんたが、わたしとうちの犬が好きなだけ生きられるように約束してくったら、木からはなしてやつてもいいよ」といました。

死神は約束しました。

みじめおばさんは、証拠としてその約束を紙に書かせてから、死神を木からはなしてやりました。

そういうわけで、人間はまた死ぬようになりました。でも、みじめおばさんとおばさんの犬だけは、この世がつづくかぎり元気で長生きしているということです。

原話：『世界のメルヒエン図書館1』小澤俊夫編訳 ぎょうせい  
再話：村上郁

